

D. H. Willson, A Royal Request  
for Trade—A Letter of King  
James I to the Emperor of  
Japan. 1958, Minneapolis.

ミネソタ大学にある James Ford Bell Collection は、商業史に関するめずらしい資料の蒐集で知られている。このほど、その所蔵の一つ、ジェームズ一世からの日本皇帝にあてた国書が原寸大に複製され、「その歴史的位置づけ」というサブ・タイトルをもった解説書とともに刊行された。本文の執筆者は一六〇七世紀の英國史を専攻するウィルソン教授。ほかにこのコレクションの管理者である John Parker 氏の示唆的な序文と、リンズホーテンの航海記からとつた地図一葉とが添えられている。三〇ページにみたない小冊子だが、紙や印制に配慮のゆきとどいた美しい本である。

ジェームズ一世の手紙といえは、すぐ思い出されるのは、異國日記におさめられている

ウィリアム・アダムスの和訳した一通であろう。これは、あらためていうまでもなく、一六一三年に日本を訪れたジョン・セーリスが家康に呈上したもののだが、このほかにもジェームズ一世の日本皇帝にあてた書翰はなお二三知られていた。たとえばイギリス東印度会社の第七次東洋航海の時、司令官アンソニー・ヒッポンに託されたものも、その一つである。これは日本にとどけられずにおわつたが、その内容はセーリスの持参した書翰と大差ないものだった。だが、このベル・コレクションのものはすこし文意がちがつていて、「われわれはすでにいろいろな機会にあなたに手紙を出したが、今日まで返信がないのは、國土が相去ること遠いためであらう」といい、重ねて友好を結ぶことを熱望し、「われわれの國民があなたの國で貿易に従うことを許可し、保護されたい」という意味のことを述べている。末尾には、王の在位九年（一六二二）一月十日の日附がある。解説には触れられていないが、おそらくこの手紙は、イギリスの Cholmondeley 家旧蔵のもので、それが何かの事情でベル・コレクションに入ったのだろうと思う。

ウィルソン教授は、セーリスが来日の時、それまでにすでに日本宛の國書が届けられていた場合のことを考慮して、文面の異なる二通の書翰を用意し、時と場合によつて適当なものを呈出しようとしたのだという想定も成り立つが、ただ家康に渡されたものは王の在位八年、つまり一六一一年一月の日附で、セーリスの出發の年のものなのに、ベル・コレクションの書翰はその翌年の日附であるから、あるいはセーリスのあとを追つて一六一二年に出帆した船隊に託されたものかも知れないといつている。いずれにしても、これは、すでにエリザベス女王の時代から、新市場開拓の必要にせまられていたイギリスの、日本との貿易に対する異常な熱意を物語るもう一つの証拠であることはまちがいないだろう。ウィルソン教授の解説は、日本側の史料にほとんど触れていない憾みがあるとはいへ、簡潔な叙述のなかに、当時の歴史的事情を手ぎわよく明らかにしている。

初期の日英交通史に関する貴重な史料が、このような形で公開されたことはまことに喜ばしい。非売品だが、ぜひほしいと思う人は Minnesota University Library の John

Parker 氏に照会すれば、あるいは頒与してくれるかも知れない。(室賀信夫)

## 天理市史編纂委員会編

### 天理市史

奈良県天理市は、旧丹波市町を中心に樺本町・朝和村・柳本町・二階堂村・福住村の三町三村が合併して昭和二十九年発足したいわゆる新市である。この市域は近時は天理教本部の所在地として最も有名であり市名の由来となつているが、今さら揚言する迄もなく原始時代以来豊かな歴史事象にとむ地域であり、関係者一同のあしかけ四年に及ぶ努力によつて市史の刊行を見たことは誠に有意義なところがある。

市史は本文(一、〇四〇頁)と史料集(六〇三頁)の二冊よりなる。まず本文は、全体を概説と各説に分つている。便宜に従つて各説より紹介すれば、第一章地理学的考察では、自然環境・人文地理双方にわたつて、豊富な統計を用いて精説される。第二章考古学的考察では、先史・原史・歴史時代にわたつ

て、遺跡・遺物・古墳などが精説される(史料集に古墳墓一覧と金石年表がある)。第三章宗教では、概説に続いて、各社寺については廃された社寺についても記録を精査して言及され、特に天理教については、一節を設けて、立教の由来から現況までを概説される。この市史にあつては当然の事ながら、特筆される点であろう。第四章民俗では、年中行事よりはじめて、祭礼と祈願・宮座・日常生活・婚姻と墓制・伝説・民謡・方言・地名が、細かく採録されている。第五章文学、第六章人物では共に天理市に関係ある古典文学や人物が紹介される。

こうした各説を通じて、この地方が、いかに深くそして広い歴史事象を蔵しているかが存分に伺われるのであるが、前篇概説篇は他地域の史料を全く借用することなく、全篇文字通り天理市史の概説を以て貫かれている。古代・中世・近世・近代の章構成は通例ながら、たとえば第二章中世は樺本庄・柳本庄・河原城庄など多くの庄園、かの著名な布留郷、十市氏豊田氏など大和武士の活躍、環濠に囲まれた郷村制の発展、そして中世の文化と、幾万言を費すとも語り尽せない歴史にみちあ

ふれている。それこそ、いわゆる「國中」の東辺に位置して発達した天理市のすがたであり、この市史の特色である。

しかし、おそらくは紙数の制約の結果であるが、表面的な歴史事象の羅列に終つて、堀り下げが必らずしも十分ではない。もちろんこの概説からでも教えられることは極めて多い。だがあえて望蜀の言を呈するならば、例えば庄園の四至復源、近世の複雑な領有貢租関係の整理、等々、各説の各章ほどの精緻さをもつて述べていたできたかつた、そしてこの市史においてははじめて果しうるテーマが他にも存するように思われる。

次に史料集は、文書では地区別に二六七点と、三箇院家抄(市城関係のみ)及び荒蒔村年代記を含み、古墳墓一覧・金石年表・小字名をのせる。文書部では、中でも天正より幕末に及ぶ荒蒔村宮座の年代記は、多方面の史料とし最でも注目される。なお史料集に載せられていないのは各所蔵文書の一部と推測されるが、省略分については、切角の機会に、せめて目録を掲載されていたならば、利用には一層便利であつたらうにと惜しまれる。

以上紹介のかたわらあえて若干の苦言をも